117年の遺愛の歩みを刻んだ本館廊下の床板木片を希望の遺愛生にプレゼントしました！！

6年かけた遺愛本館の修復工事がほぼ終了しました。ぜひ改めて見ていただきたいのは本館の床（ゆか）です。この床はどこを見ても木の節（ふし）が見当たりません。さらによく見るとすべて柾目（まさめ）の床板です。「柾目の無節」と言われる上等な木材が使われています。長いものでは8ｍの長さがあります。　大工さんの話によると、断面の年輪の様子からダクラスファーという樹種ではないかとのこと。

実は、この床板は1906年（明治39年）、118年前にアメリカのシアトルから船で函館まで運ばれてきました。残されている付属文書（領収書）によると、床板の枚数は7,775枚、函館税関から杉並町の遺愛まで馬車96台で運んだそうです。同時に屋根材のﾙｰﾌｨﾝｸﾞ、ﾙﾌﾍﾟｲﾝﾄ、ﾙﾌｾﾒﾝﾄ、ﾋﾞﾙﾃﾞｨﾝｸﾞﾍﾟｰﾊﾟｰ、釘が運ばれていることが記載されています。これらはアメリカメソジスト監督教会信徒の方からの寄付だそうです。

本館の床板は、当時から大切にされてきており、生徒・先生は上靴の上にネルのオーバーシューズを履き、廊下を歩いていたようです。当時を知る同窓生の話によると、床拭きは日課だったそうです。

第二次大戦末期の1945年4月に遺愛本館は日本軍に接収され、軍人が軍靴（ぐんか）で廊下を歩いたため、床にボツボツと穴があき、今もその跡（校長室前の床）が残っています…よく見て下さい。

今回の保存修理では、一度すべての床をはいで再び同じ場所に戻しています。しかし何％かの床板は割れたりして戻せないものもありました。これらを2cm × 10cmほどに切断して記念品にし、希望の生徒にプレゼントしました。（『遺愛学院本館の秘密』増田宣泰氏より）

1942年（昭和17年）遺愛生による本館廊下の床を水拭き

遺愛本館床板の木片

2024年9月18日